
恋する12星座

糸雨 冷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する12星座

【Nコード】

N1737BA

【作者名】

糸雨 冷

【あらすじ】

Fortune Fateさんからお題お借りしました。

お題短編なので連載にしましたが1話1話はつながっていません。

1・羊のお願い

カタン。

隣の家の扉は少し古びていて、開けるたびにそんな小さな音がする。この家には俺の大好きな女の子が住んでいて、彼女はなんだか、この頃あまり寝れてないみたい。

何でそんなことわかるかって？

そんなの簡単。

俺が、ずっと彼女のこと見てるから。

別にストーカーとかそんなんじゃないよ？

ただ純粹に好きただけなもの。

例えば俺が10歳の子供でしかなくたって、恋や愛の意味がよく理解できなくたって、君を思うこの気持ちだけは恋だって信じてる。

だから俺はこうやって不審者よろしく、夜中に自分の部屋を抜け出して隣の家にやってきたのだ。

とん とん とん。

彼女の部屋の襖を3回。

中からかすかな音が聞こえて、ゆっくりと襖が開いていく。

「真昼、こんばんは。」

ねえねえ俺は、君のことが大好きなんだ。

だからお願い、眠れない夜は隣においてくれませんか？

5 獅子はいじも試とれる(前書き)

微B L、E v e t o E v aの竜里と呼ば

5・獅子はいつも試される

下を向いて、ぎゅっと自分が纏う着物を握り締める。

小さなその手には見ていて痛々しいほどに力がかかっており、彼の精一杯の努力が窺える。

やや伏せぎみの瞳は何にも染まらない漆黒の色。

端正な顔立ちながら、眉間に皺を寄せて一点を見つめていた彼は、我慢の限界がきたのかくるり背を向けて歩いていく。

高い位置でひとつに纏めた漆黒の髪が、歩く彼の動作に合わせてゆらゆらと揺れる。

それはまるで気位の高い猫がしっぽを振って歩くようで、去っていき彼の背を楽しげに見つめていた竜里は思わず笑みを零した。

「天姫あまめ、彼を遊ぶのが楽しいのもわかるけど話の途中よ?」

名前……ではないが自分のことを呼ばれ、先ほどまで会話をしていた相手へと視線を戻す。

ああ、いけない。

確かに香梓かすしの言うとおりだ、でも仕事も大切だけど彼で遊ぶことは竜里りゅうりの生きがいなのだ。

「ごめんね、香梓。あとでちゃんと聞くから……ちょっと行ってくる。」

笑ってそう言えば心底呆れたとでも言いたげにため息を吐かれる。当たり前のようにそのため息はスルーして、うちの従業員は物分りがいいなあなどと考える。

口に出して言ったら、当たり前のように文句を言われそうだが。

すれ違う人を適当に受け流し、階上へと進む。

長い薄紫の髪を結び上げた簪がシャラシャラと音を立て、それが少し耳障りに感じる。

今は部屋ですねているだろう彼はこの音が心地よいと言ったが、幼い頃からこれを身に着けている竜里にはあまり理解できない。

カタン、小さな音を立てて階段を上り終え、廊下への先へ進む。

眺めがよいのはいいことだが、いかんせんこの広い天姫殿の最奥までいくには時間がかかる。

開け放たれたままの自室の襖。

当たり前のように天姫殿の最上階、最奥の部屋は天姫の部屋である。その部屋の中、部屋の主ではない人物がこちらに背を向けて座り込んでいる。

高い位置で結われた漆黒の髪が未だ幼い華奢な背へ流れる。

すねた子供をそのまま現したような後姿に竜里は無意識ながらも意地の悪い笑みを浮かべる。

「ねえ・・・なんでじつと俺を見ていたのに、何も言わずに立ち去ったの？」

ああ意地が悪い、意地が悪い。

それもこれも彼がいじめたいほどに可愛いのだから、仕方がない。

12・空飛ぶ魚(前書き)

天女の消えた楽園の未来

12・空飛ぶ魚

あの頃の俺はひどく不器用な子供で、今でも到底器用など呼べたものじゃないけれど、それでもあの頃よりはいくらかマシになったと思う。

頑ななまでに仕事仕事と彼の役に立つことばかりを考え、他のものには一切視線を向けることをしなかった。

それだけ俺の世界は狭くって、彼だけが俺の世界の基準だったただなんて。

ふと窓の外に視線を向ければ夜もとうに更け、仕事を始めてから何時間もたっていることがわかる。

ああ、今日はずっと部屋にこもって書類相手の仕事ばかり。身体のおちこちが凝り固まっているが、そろそろ部屋でできない仕事をしに行こう。

髪を結い上げた簪が涼しげな音を立て、揺れる。

ほとんど白に近い白銀の簪だけは本来の天姫の色である淡い紫の髪にも、鮮やかすぎる緋色の俺の髪にも合う。

哀しげで、涼しげなこの音を聞くと、俺は俺の世界であった先の天姫を思い出す。

彼を亡くしたことは、何よりも何よりも悲しいことだった。

それでも俺は、その後に得たものがどれだけかけがえのないものかちゃんとわかつているから・・・自分は独りだなんて、過去に戻りたいなんて絶対に言わない。

重たい天女の衣装を身に纏い、愛想を振りまくのも仕事の一環。

そうはわかっただけでもいくらやっても慣れなくて、慣れないながらも仕事をこなし、時間はいつの間にか明け方間近。

昇りくる朝日は夜通し仕事をしたこの身には眩しすぎて、思わず目を顰める。

そんな風に窓の外を見つめていたら、何かが背後にぶつかっただ。

そちらを振り返るとわらわらと足元に3人の子供が纏わり着いている。

緋色、薄紫、緋色。

双子は俺と同じ髪の色をしているが、末っ子だけは隔世遺伝で天女と同じ色を受け継いだ。

そんな子供たちから数歩離れた場所で雪葉が俺たちを楽しそうに見ている。

「・・・おはよう。」

「おはよう、雅灯。」

いったいこんな早くから子供たちまで起き出して、いったい何かあったのだろうか。

ふと子供たちに絡まれたまま考えるが、思いつくようなことはない。それより着物を引っ張るのはやめなさい、乱れるから。

「ほら、お父さんに言いたいことがあるから起きたんでしょ？」

雪葉の言葉に、末っ子が俺の目の前に小さな箱を差し出した。

そして声をそろえて言う。

「お父さん、お誕生日おめでとつ。」

君に出逢うまで不器用な泳ぎ方しか知らなかった俺は、両手に溢れるほどの大切なものを手に入れた。たくさんのものをくれた最愛の

君たちに。

『ありがとう』

8・微毒の蠍

とろとろ とろとろ

煮込んでみたの。

そしたら一緒になれる気がして。

もう離れないですむ気がして。

きつと重い・・・依存愛。

私は貴方を愛しすぎて、貴方は私を愛しすぎて・・・そしてきつと永遠を望んで、永遠に壊れたの。

「え、プレゼント？」

にっこり笑って、ヒナが手を差し出した。

彼の手のひらに握られた小さな包み。

ヒナは私に似合いそうだというものを見つけたら、こんな風に特別な日でない日であってもプレゼントをしてくれる。

包みを開けてみると甘い赤色の綺麗な石。

まるでととろ煮込んだ林檎ジャムみたい。

透き通る赤い色はヒナの赤とは違って見えて、でもやっぱりヒナの赤に少しだけ似ていた。

「なんか、俺たちみたいだね。」

そう言っつて、ヒナが笑う。

ヒナの笑顔は雛菊の花に似ていると思うけど、

今みたいな甘さを含んだ笑みはどこか林檎ジャムに似てる。

ヒナが林檎、素直じゃない私はレモン。

砂糖という愛情で結ばれて、きつと私たちジャムになるの。

ととろととろ ととろととろ

弱火で煮込まれた私たちは、甘い赤色の林檎ジャムになるけれど、適度なところで火を止めないと。

相手を愛する気持ちだけではいつか鍋が壊れてしまう。

だけど私たちはあまりにも子供で、相手を愛し続けることしか知らなかったの。

煮込まれ続ける林檎ジャムと冷めることのない私たちの愛情。

気づいた頃には鍋はひび割れ、私の身体は動かなくなっていた。

甘いだけ、痛いだけじゃ物足りない。

それでも私たちはあまりに二人だけの世界を愛しすぎた。

2・牡牛のノスタルジア

ぼたぼた。

はらはら・・・ひらひら？

ああ、それは違う。

そんな風にまったく関係のないことを繰り返して考えても、相変わらず俺の指は目の前で泣く真昼の頬を拭い続ける。

青い、瞳。

透明な涙と同じ印象を受ける綺麗な青の瞳。

無垢で穢れを知らないような白銀の髪は肩の上を滑り落ち、緩やかな曲線を描く。

ああ、綺麗。

「真昼、真昼・・・。」

名前を呼ぶと、目を伏せていた彼女がゆっくりと視線を俺に向ける。青の瞳を縁取る長い白銀の睫についた透明の涙がキラキラと光っている。

「大好きだよ、真昼・・・。」

だから、泣かないで。」

俺の言葉に、最愛の真昼はその瞳に涙を浮かべたままでありながらも、ゆらり、淡い微笑みをその口元に浮かべながらもゆっくりと優しく目に目を細めた。

「私も、ヒナを愛してるよ。」

だから・・・ヒナはちゃんと、前を向いて生きていつて。」

前を向いて、生きていつて・・・。

その言葉に鈍器で頭を殴られたような感覚になり、そこで視界は暗転する。

ぱちくりと目を瞬く俺の前に真昼はいることはなく、その部屋にいたのは布団に転がったまま涙を流す、俺だけだった。

泣き虫だった真昼が泣くことはもうなくて、俺が大好きだった笑みを真昼が浮かべること、もうなかった。

真昼が俺の目の前で、俺の名前を呼んでくれるだけで俺は幸せだったのにもう俺が ヒナ と呼ぶ真昼の声を聞くことも、なかったんだ。

いくらノスタルジアに浸っても、俺が一瞬以上の幸せを得ることは
なかった。

だって最愛の君は死んでしまったのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1737ba/>

恋する12星座

2012年1月4日13時50分発行